

若手研究者を中心に、国際共著論文の執筆など、今後の展開が期待できる計画を支援することにより、本学における国際共同研究の機会を増加させ、研究力の強化を促進する。



本事業のポイント

- 若手研究者・女性研究者を重点的に支援
- 共通したシンプルな枠組
30日以上、180日以内 ※年度を超えた派遣・受入れは認められない(H29年度から)
- グローバルナレッジパートナー校との取組に対する支援枠を新たに設定 (H30年度から)
- 旅費・滞在費等を支援
- 受け入れた研究者に対するサポート、研究支援者雇用経費も支援、在留資格認定証明書交付申請や宿舍手配を本学サポートオフィスが支援



取り組み実績と得られた成果

H25-
H30年度 派遣40名 受入れ35名

相手校: オックスフォード大学、マサチューセッツ工科大学、スイス連邦工科大学 他



成果の一例

査読付き共著論文の発表、合同シンポジウムの実施、書籍の共同出版・寄稿、部局間協定の締結

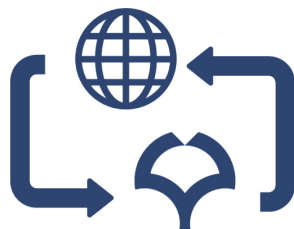


採択者の声

● 本学受入れ研究者の声

人間科学研究科研究者: 国際共同研究の推進、学生たちへの指導、研究の面白さ、成果創出の機会、留学経験のある学生もない学生も英語能力の向上に役立ち、あらゆる面において大きく貢献してもらうことができた。学生たちにも成果物である国際共著論文の共著者となる機会を与えることができた。

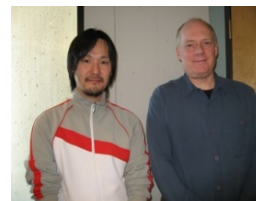
理学研究科研究者: 日本への長期滞在を希望する海外の研究者にとって大変良い機会となり、海外の研究室との共同研究体制構築に役立った。



国際共同研究の
継続・発展へ

● 派遣先受入れ研究者の声

It is difficult to say how nice it was to work with him. Our collaboration was very fruitful. Since we shared the same office for one year, I can testify that he is a very hard worker, but I was first of all impressed by his knowledge. (理学研究科研究者を受入れ)



工学研究科・福原助教(平成25年度
マサチューセッツ工科大学派遣)

● 派遣された研究者の声

基礎工学研究科研究者: 次世代のネットワーク形成の礎となる交流が可能となり、本学の将来的な研究力向上につながる。研究の進展に役立つとともに、外国の研究者の価値観や研究の進め方を学ぶことができた。



経済学研究科・松村准教授(平成26
年度スタンフォード大学派遣)



人間科学研究科・大谷教授、Annear博士(平成28
年度タスマニア大学より
受入れ)